

授業「保育者論」において目指す保育者像を探る試み ～『窓ぎわのトットちゃん』を題材としたグループ発表をとおして～

和田 幸子

I、実践の背景と目的

1、科目「保育者論」について

「保育者論」は保育士養成課程の新カリキュラムとして2011年より加えられた科目の一つである。この新カリキュラムでは、子どもを取り巻く状況の変化に対応できる保育士を養成するために、「保育者論」の他、「保育の心理学」「保育課程論」「保育相談支援」が新設されたのであった^{注1)}。それまでは科目「保育原理」に含まれていた内容のうち、保育士の役割と倫理、保育士の制度的位置づけ、保育士の専門性を「保育者論」に含ませ、さらに栄養士や看護師など保育現場で働く他職種および管理職も含めて保育者と呼び、保育者の協働、保育者の専門職性についての内容を加えて、新設科目とした。そして保育者養成校では保育士、幼稚園教諭として、つまり保育者^{注2)}としての成長を志向する科目に位置づけた。

科目「保育者論」のための様々なテキストが発刊され、それぞれの保育者養成校では授業が行われてきた。そこで各テキストの内容分析¹⁾や、保育者養成校の「保育者論」のシラバス分析研究²⁾がなされてきた。しかし、「保育者論」の授業構築に向けての授業実践報告は見いだしにくい状況にある^{注3)}。筆者は、学生が保育への興味を保ち、保育者としての歩みをどのように続けていくかを考えるための「保育者論」の授業を構築する必要があると考え、模索を始めたところである。本稿ではその一部を報告し、考察していきたい。

2、本学の「保育者論」と本稿の目的

授業「保育者論」では保育者の役割と職務内容の理解をテーマとする。本学ではこども教育学科1年生前期に開講され1.教育・保育関連法規に定められた幼稚園教諭・保育士の位置づけや職務内容を理解する、2.幼稚園教諭・保育士の専門性について理解し、自らの保育者像を言語化する、3.保育者の成長と、それを支

える研修のあり方を理解する、4.保育者の協働について理解する、の4点を到達目標にしている。その内、2.幼稚園教諭・保育士の専門性について理解し、自らの保育者像を言語化することに着目し、試みた授業について本稿で取り上げる。

保育者になる志を持って学修を始めた学生が、保育実践を支える子ども観や具体的な方法があることを学び、専門職としての保育者像をイメージしていくのである。つまり、子ども理解、子どもへの願い、手だてが循環していく保育実践のあり方を学修する必要がある。そのために、本授業では黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』を題材としてグループ討議と発表を行った。その過程を報告する。本稿の目的は、初期段階の保育者養成教育において、一つの物語を題材として目指す保育者像を探ることの意義を提示することである。

II、目指す保育者像を探る試み

1、保育実践における3つの視点の循環について

堀は、子ども理解、子どもへの願い、手だて、の3つの視点をもとに保育実践研究を行うことを提案したのであるが³⁾、この3つの視点の循環は保育者が保育を実践していく際にも有効だと考える。

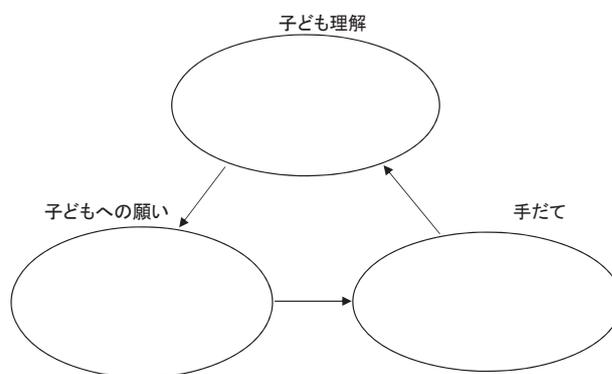


図1) 3つの視点の循環

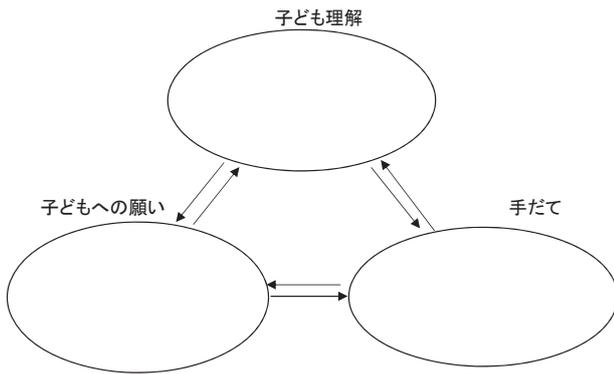


図2) 3つの視点の循環と見直し

保育者は目の前の子どもと関わりながら理解のまなざしを向ける。複数の子どもがいて、瞬時毎に変動していく保育状況の中で、子どもたちと活動を共にしながら一人ひとりをよく見ていくのである。保育者の子ども理解とはこのようなものである。保育者は子どものさらなる成長に向けての具体的な願いを持つ。子ども自身が考えていることと照らし合わせ、すりあわせをしながら、その願いを具現化すべく手だてを考え試みる(図1)。あるいは、子どもへ願いを向けながらも常に子ども理解を見直していく。手だてを行いながら、子ども自身が願っていることを問い続けていくことが必要である。さらには、試みた手だてによって、子ども自身の心の動きがどのように生じたのか読みとろうとする作業を経て、子ども理解を深化させていく。図2のように、矢印が双方に向いているのは、保育者の思いと子どもの思いを常に照らし合わせているイメージである。こうして3つの視点を絶えず見直しながら、3つの視点が循環して保育実践が続いていく。保育者はこのような保育実践の行為のただ中で経験知を重ねていく。行為の中で省察を行う者をD. ショーンは「反省的实践家」⁴⁾と呼び、複雑、不確定性の高い職務行為の中にある知を明らかにすることをすすめたのであるが、上記の3つの視点とその循環を手がかりに省察をしていくこと自体が保育に必要な専門性だと筆者は考える。そこで「保育者論」において、この視点と循環をイメージしながら保育実践を読み解くという経験をしてほしいと考えた。

2. 『窓ぎわのトットちゃん』の教材性

「これは、第二次世界大戦が終わる、ちょっと前まで、実際に東京にあった小学校と、そこにほんとうに通っ

ていた女の子のことを書いたお話です」というリード文で始まる『窓ぎわのトットちゃん』は、タレント黒柳徹子氏による自伝的物語である。「トット」ちゃんとは「徹子」をそのように聞き取り発音していたからという⁵⁾。1981年初版、ハードカバー、文庫、新書、絵本版が刊行され、いわさきちひろ氏の表紙絵と挿絵とともに親しまれてきた。英訳版^{註4)}も出されている。小森昭宏氏による音楽物語も作曲され、演奏と黒柳の朗読で『窓ぎわのトットちゃん』を鑑賞することもできる^{註5)}。

まずはじめに、公立小学校に入学したばかりのトットちゃんの授業中の様子が描かれている。机のふたの開け閉めを続け、窓ぎわからチンドン屋を呼び込む、鳥と話すなど、担任の先生から理解できない子だ、クラス中の迷惑になる、見きれないと訴えられた母親は転校せざるを得ないと考える⁶⁾。そして転校したのがトモエ学園であった。古い電車の車両が教室であり、校門は生木であった⁷⁾。この学校での教育、人との出会いがトットちゃんの心を捉えていく。筆者は以下の5点から、本著には「保育者論」の教材としての可能性があると考えている。

(1) トモエ学園について

トモエ学園は、東京、自由が丘で小林宗作によって昭和12(1937)年4月に始められた私立の小学校である。同年、トモエ幼稚園も開設している。大正自由教育運動の理念を具現化しようと設立され、定型化した一斉教育を排除し、ユニークな教育がなされた。主な特徴は、自主教育と散歩学習である。本著にも記されている具体的な実践は、今日の小学校「生活科」、幼児教育・保育における領域「環境」の活動を考える際に、さらには幼児教育から小学校教育へのなだらかな移行のあり方を考える際、有用であると考えている。

またトモエ学園では、先駆的な音楽教育の実践がなされていた。小林は以前には音楽専科教員として公立・私立小学校に勤務していたが、その過程で幼児教育の充実に向けての使命感を持ち、幼児の音楽教育研究に転じようとし、パリでE・J＝ダルクローズからリトミックを直接学んだ経歴を持つ。小林が掲げた「総合リズム教育」理論は、音楽と身体運動を連合させた実践理論であり、トモエ学園を実践の場としたのであった⁸⁾。本著の中には、日本で初めてのリトミック実践の様子が描かれている^{註6)}。

これらの教育実践は長年の子どもたちとの関わりの中で小林が創出した手だてであった。トットちゃんら子どもたちはそれらをどのように受け止めたのか、本著から読みとっていききたい。子ども主体の学習環境、子ども自らが興味を向け学習を進めるための物的、人的環境作りについて示唆を受けたい。

(2) 小林宗作校長とトットちゃんの出会

小林宗作校長は1年生のトットちゃんが話すままに聞いた。転入後も自由奔放な言動を繰り返すトットちゃんに、親を呼び出して注意をするようなことはせず、「君は、ほんとうは、いい子なんだよ」という声をかけ続けた⁹⁾。おぼろげながら疎外感を持っていたトットちゃんは自信を取り戻していく。小林校長の見守りの内に、トットちゃんはトモエ学園の仲間と日々を楽しんでいく。

その後、戦争のためにトモエ学園と別れなければならなくなった悲しみの極みに際してトットちゃんは、「君は、ほんとうは、いい子なんだよ」と言ってもらったことを忘れないようにしましよと、自分を奮い立たせた¹⁰⁾。さらに、大人になった黒柳は、子ども時代を回想しながらこの言葉が人生を支える言葉となっていることに気づいた。小林校長との出会いは、幼いトットちゃんが人格を持った人として認めてもらった経験であった。

(3) トットちゃんと級友

トモエ学園の級友との関わりが描かれている。授業や行事に、級友とわくわく心を動かしながら参加したこと、羽目を外して意地悪をした子に憤ったこと¹¹⁾など、1年生が他者と関わりいろいろな心情を経験していることがわかる。身体にハンディのある子も数人いたようである。「どうしてそんな風に歩くの」と不思議に思う気持ちを正直に話す一方¹²⁾、「みんないっしょだよ」との小林校長の言葉¹³⁾のとおり、一緒に育ちあっていく。トットちゃんらは、助けてあげると考えたことは一度もなく、一緒に居て、一緒にする、という仲間づくりをしていた¹⁴⁾。ここには、今日目指すべきインクルーシブ(包括的)保育、教育のあり方の一例を見ることができると考える。

(4) トットちゃんの家生活

生活を共にする家族は、トットちゃんの言動に驚かされながらも、子育てを楽しんでいる様子である。飼っている犬とのふれあいも描かれ¹⁵⁾、落ち着いた家庭生

活であることが感じられる。またバイオリニストの父親の演奏活動を応援していたのだが、戦争中、軍歌を弾くように要請されたときには、それを嫌う父親の気持ちを理解し支えた¹⁶⁾。トットちゃん、父親、母親、それぞれが属する学校、社会において直面する悩みを、家族で共有している様子が伺える。

(5) 平和であること

戦争の恐ろしい影がトットちゃんらの生活の中にも入り込んできた。とうとう、焼夷弾によってトモエ学園の校舎が破壊されてしまった。トットちゃんらは東北へ疎開した¹⁷⁾。

今日、学生も祖父母世代から戦争体験を聞くことが多少はあるだろうか。本著を読み進んだ者は、トットちゃんら子どもの育つ場が戦争により奪われてしまったことに心を痛めるであろう。保育者を目指す学生には、子どもたちの日常の平和、安全を常に願い、世の状況の変化に敏感であってほしいと願う。

このように、トットちゃんと校長先生、級友、家族との関わりが描かれ、生命感あふれる物語となっている。それゆえ級友や犬との別れの場面が読者にも生々しく迫る。上記ポイントを読みとることを目標に授業展開をした。

3、対象とする授業について

2015年度前期「保育者論」は、幼児教育コース1年生49人が受講し、筆者が担当した。木曜5講時に、1号館特4教室で行った。15回の授業の概要は表1のとおりである。

表1)「保育者論」授業概要

回 / (2015)	授業概要	課題・ワークシート		
① 4/9 (木)	幼稚園教諭 / 保育士の職務内容		↑	
② 4/16 (木)				
③ 4/23 (木)				
④ 4/30 (木)	3つの視点の循環	レポート 課題提示	リアクシ ョンペー パー 記入	
⑤ 5/14 (木)	保育環境			
⑥ 5/21 (木)				
⑦ 5/28 (木)				
⑧ 6/4 (木)	幼・小および保・小連携	↓ レポート 提出		
⑨ 6/11 (木)				
⑩ 6/18 (木)	グループ討議とポスターづくり①			
⑪ 6/19 (金)	グループ討議とポスターづくり②			
⑫ 6/25 (木)	グループ発表①	ワークシ ート記 入		
⑬ 7/2 (木)	グループ発表②			
⑭ 7/9 (木)	グループ発表③			
⑮ 7/16 (木)	保育者の協働 / 保育者の成長	授業全体 の振り返り		↓

第1~3回授業では幼稚園教諭・保育士の職務内容を学び、第4回(2015.4/30)では、上記の保育実践を支える3つ視点の循環を紹介し、具体例をあげて解説を行った。さらにレポートを課した。

〈レポートについて〉

『窓ぎわのトットちゃん』を読み、

①一番印象に残った場面を目次から書き出して下さい。

②それについてのあなたの考えを文章でまとめて下さい。

レポートは第9回(6/11)授業時まで提出させ、学生が取り上げた目次から、2~4テーマごとに筆者が10グループに分けた。グループのメンバーは4~5人とした。主体的にグループ討議に参加するための適当な人数と考えた。

第10(6/18)~11(6/19)回でグループ討議と模造紙大のポスター作りを行った^{注7)}。グループ討議のテーマは下記のとおりである。テーマと作業の手順はプリントに記して配布した。グループ討議の際には、レポートを一旦返却した。討議に必要なだと考えたからである。

〈グループ討議のテーマ〉

『窓ぎわのトットちゃん』に登場する学校、家庭、社会において、「子ども理解」「子どもへの願い」「手だて」がどのように循環していたか。

第12(6/25),13(7/2),14(7/9)回授業はポスターを用いたグループ発表を行った。テーマのたまかなあらずと、トットちゃんや子どもたちがいかに心を動かして過ごしていたのか、先生方がどのように配慮していたのか、グループで読みとったことを発表した。そして発表を聞いた学生達は、3つの視点の循環図のワークシートにメモを書き入れていた。質問や感想も出された。その後、展覧会と称してポスターの間近まで行き、じっくりと見る時間をつくった。そして各自が印象に残ったポスター部分にタックシールを貼った。筆者からは、ポスター内容に関する歴史的な事柄、関連記事を紹介した。トモエ学園の校舎、授業風景や小林宗作の写真も紹介した^{注8)}。トモエ学園の教育理念が大正自由教育運動の流れをくむものであること、小林の長年の研究を実践すべく作られた学校であることを知ってほしいと考えたからである。第14回時のワークシートには、循環図に加え、保育者の専門性、目指す保育者像を記入する欄を設けたので、学生は文章で記した。

第15回(7/16)授業は授業全体の振り返りを行った。なお、授業毎にリアクションペーパーに授業で学んだこと、考えたことを自由記述させている。

以上、『窓ぎわのトットちゃん』を題材とした授業は、図3のように進めた。

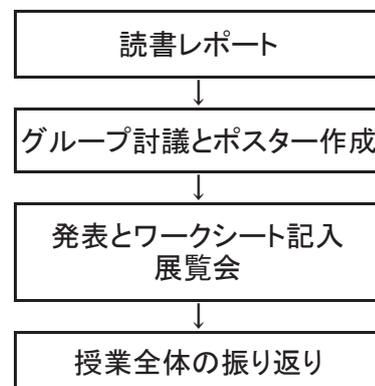


図3)『窓ぎわのトットちゃん』を題材とした授業の進行・展開

Ⅲ、方法

読書レポート、作成したポスター、発表時のワークシート記入、タックシールの貼られたポスター、授業全体の振り返りの記入、リアクションペーパー記載に記された内容から、学生が目指す保育者像を抱くようになっていったことを報告する。学生には授業研究の一環として資料を使用することについて伝えた承を得ている。

Ⅳ、結果

1、読書レポート

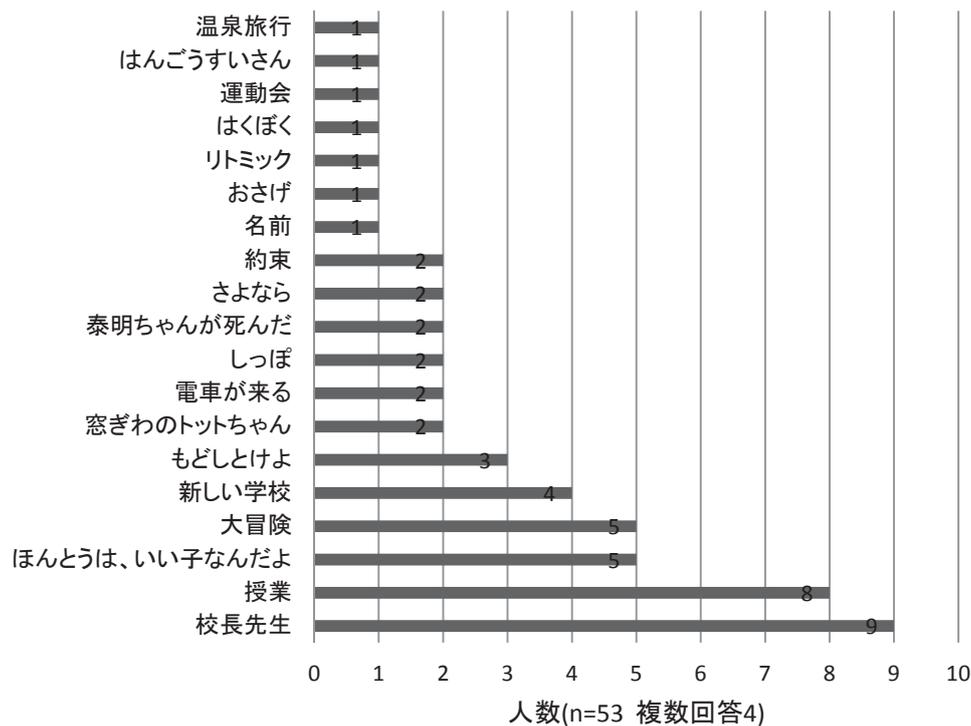
受講生全員がレポート記述に取り組むことが出来た。一番印象に残った場面として選んだテーマとその人数は表2の通りである。あげた場面は「校長先生」9人、「授業」8人、「ほんとうは、いい子なんだよ」「大冒険」5人、「新しい学校」4人、他は1~3人ずつであった。校長先生の心遣いによってトットちゃんが生き生きと学校生活を送るようになったこと、ユニークな授業の仕方、子どもたちが考えていること、子どもが主体的に始めることには意味があるということへの気づ

きを記していた。「こんなに面白いと思ったのははじめて」「普段読書をしないのだけれども、一気に読んだ」とあるように、本著が学生にとって興味のある内容であったことがわかる。「平和であることは大前提だが当たり前ではない」と平和について考え、そして「どんな先生になりたいのか考え直すことが出来た」と目指す保育者像を描くきっかけにもなった。学生が、保育者になる自分の立場に引き寄せて考えようとしている姿を見ることができる。また「悩んだりわからなくなったらもう一度この本を読みたい」という感想は、保育者としての歩みを支える可能性を持つ書物との出会いを意味すると考える。

2、グループ討議とポスター作成

補講調整の関係で2日間連続での作業となった。第10回時には、グループメンバーが選んだ箇所のあらすじを確かめ合い、感想や考えが出され、活発にグループ討議がなされていた。しかし、それをどうまとめたらいいいのか、難しいようであった。筆者は討議中のグループから呼ばれ意見を求められた。担当箇所の内容とそこから考えたことを、3つの視点に照らし合わせてほしいと考えたので、子ども理解、子どもへの願い、

表2) 選んだテーマ



手だてを抽出できるように助言した。その後ポスター作りに取りかかった。模造紙に巧みに絵だけで表したグループもあった。図や文字で構成したグループも、クレヨンやマジックで色づけ、第11回時の終了時刻間際まで取り組んでいた。1グループのみ時間内に仕上げる事が出来なかったため、課外にも取り組んだ。

この日のリアクションペーパーには、「同じテーマを選んだ人がいて嬉しかった」「今まで話したことの無い人もいて緊張したけどきちんと話し合いをすることができた」と記された感想があった。グループ分けによってはじめて出会った人と、同じテーマゆえに意見を交わすことが出来た。自分の考えを言えたことに加え、「他の人の意見を聞くことができた」「話を聞いているのが楽しかった」「みんな色々考えが違って楽しかった」とあることから、いろいろな意見と自分の考えを照らし合わせることに楽しさを感じていることが察せられる。そして「トットちゃんはどうなのかなのかよくわかった」「理想の先生についてみんなと話し合ったのが楽しかった」とあることから、討議により理解を深めたと考えられる。しかし、「どう書くか悩んだ」と感想にあるように、理解の深化を書き表すには戸惑いがあり、時間を要した。「それぞれの考えをまとめて一つにするのは、少し時間がかかった」のであるが、制限時間の定められた中で、まとめ上げる必要を各自が自覚し、作業を進めることができた。ポスター作成では、「どんどん色がついていくのはとても嬉しく、「完成して嬉しかった」とある。自分たちのグループの討議、ポスター作成が充実したものであったからであろうか、「他のグループのポスターや発表がとても楽しみになった」と記した学生もいた。

3、発表とワークシート記入、展覧会

3回に渡ってグループ発表を行った。それぞれのグループの発表テーマは表3のとおりである。

発表グループのメンバーは前に出て、仕上げたポスターをマグネットで黒板に貼った。ポスターを見ながら、あらずじ、グループ内で出た意見、3つの視点での解釈を挟みながら発表をすすめた。質問、感想を聞いている学生らに求め、それに対して応えることも含めて10分間の進行を発表グループに任せた。

発表を聞いている学生は、循環図のワークシート(A3サイズ)へ記録した(図4)。その日の発表3~4

グループの内容を取り混ぜてメモした学生、また循環図の楕円形を3~4等分して記録した学生もいた。展覧会では、ポスターに記された細かい部分もじっくりと見た上で、最も印象に残った部分にタックシールを

表3)

発表日	グループ	テーマ
2015/6/25	A	名前 窓ぎわのトットちゃん 学校 おさげ
	B	新しい学校 校長先生
	C	校長先生 もどしとけよ
2015/7/2	D	授業 運動会 はんごうすいさん 温泉旅行
	E	授業 電車が来る
	F	授業 リトミック はくぼく 大冒険
	G	校長先生 しっぽ
2015/7/9	H	本当はいい子なんだよ 大冒険
	I	大冒険 泰明ちゃんが死んだ
	J	本当はいい子なんだよ さよなら 新しい学校 約束

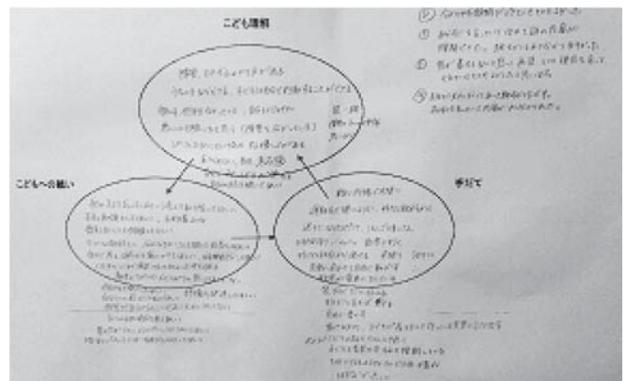


図4) メモを記入した循環図のワークシート

貼っていった（写真1・2）。

第14回時のワークシートには、循環図に加え、保育者の専門性と目指す保育者像を記す欄を設けた。そこに学生が記したものから以下に挙げてみる。「しっかり子どもの話を聞いてあげる」とあるのは、トットちゃんがまず校長先生にそのようにしてもらったからであろう。「子どもと同じ目線になる」ことへの気づきは、トットちゃんを目線で本著を読み、子どもの行動には理由があることを知ったからであろう。「子ども一人ひとりの特徴や本質を理解した上で子どもたちを見守る」「子ども一人ひとりの個性を大切にできる」とあるように一人ひとりの子どもへ理解のまなざしを向けたいと考え、「子どもの声、心に耳を傾け、補助、見守り、応援する人」になりたいと記している。また「素直になれるような環境をつくる」「安心できる環境を整える」こと、つまり環境作りが保育者の大切な働きであることを学んだことがわかる。

4、授業全体の振り返り

本授業を通して最も印象に残った内容として、トットちゃんについての授業をあげた者は34人いた。以下、「行事」4人、「危険防止」「3つの視点の循環」が各3人、以下1~2人ずつであった（表4）。トットちゃんについての授業は複数回にわたっての授業となったため、印象が強いと答えた学生数が多いのは自然なことであろう。「校長先生の写真などを見て想像と一緒にだったり、異なっていたりと面白い点がいくつもあった」とあるように、小林宗作校長の人となりやトモエ学園の教育実践への興味を深めたことをきっかけとして、「私がどのような保育者になりたいかなるべきか、見えてきた」「自分が思う保育者像を少しははっきりとさせることができた」と理想とする保育者像を探る過程であったことが察せられる。学生は、これから出会う子どもの「自発性、創造力、個人を尊重することが保育者には必要」と考えているのであるが、子どもたちの実際の関わりの中で、このことを常に追求して



写真1) 展覧会

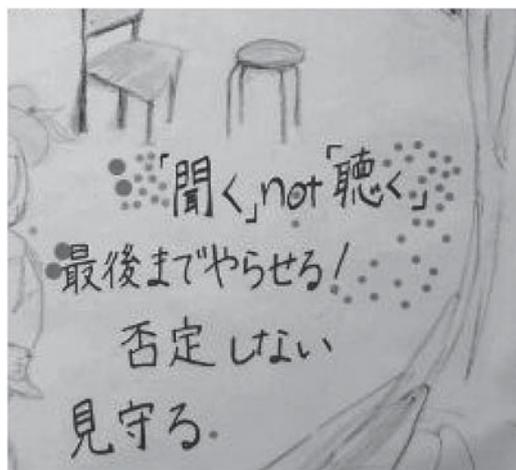
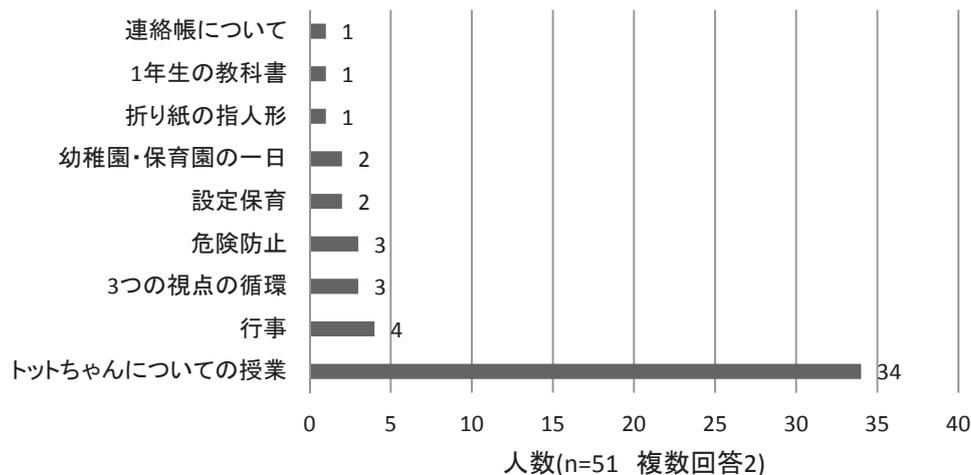


写真2) タックシールを貼った部分

表4)「保育者論」授業を通して最も印象に残った内容



いかなければならないのである。それは容易なことではない。「何度も読みたい」との記述から、本著に登場する教師と子どもの、その存在の尊さを今後何度も確認することによって、自らの保育者としてのあり方、つまり自らはいかにして子どもに寄り添う保育実践者となっていくのかを、考え直していこうとする姿勢を読みとるのである。

5. リアクションペーパー

毎週記入を重ねてきたリアクションペーパーであるが、第15回目の欄には、授業全体を通して学んだこととして、子どものことを理解できるようになることや、子ども一人ひとりを見ることと全体も見ること、季節や日本の文化を伝えられるような保育者になりたいと、目指す保育者像を明らかにしつつある姿が読みとれた。そして、手だてにつなげることの出来る遊びを今後たくさん知りたいと、学びへの意欲を高め、保育者になりたい気持ちを強くしていることが記されている。

V. 全体的考察

1年生前期は、学生にとって大学での学び方を習得していく時期である。とりわけ本学科にとっては、自らが保育実践者となる自覚を徐々に強めていく時期である。そのような時期に、保育実践が子ども理解、子どもへの願い、手だて、の3つの視点の循環によって続いていくことを、その具体的な実践から学ぼうとし

たのであった。

まず、課題とされた読書とレポート作成について振り返る。学生の報告にもあるように、これまでに本を読む、読み切る、という経験の少ない学生が、本著の物語に引き込まれた。この経験は貴重である。文字で書かれた物語を読むことによって、その情景、登場人物の言動を想像したのである。本著がおもしろかった、というのは、登場人物の心の動きを自分に引き寄せ、理解しようとしたこと、また、自分ならどのようにするだろうかと考えたことによる。これは自分自身への問いかけである。その思考過程を文章にして表した読書レポートであった。

次に、上記の読書レポートで各自が文章化したことをグループメンバーに伝えた。他者の考えも聞いた。そして相互に照らし合わせ、グループの見解としてまとめ上げ、ポスターに表した。一人ひとりの考えが尊重されたポスターのできあがりを感じ、グループメンバーの協働の発表として責任を持って発表した。そして他のグループの発表も楽しみに待つことができた。保育者は瞬時毎に変動していく保育状況の中で、そのつど判断をして保育行為を為していくのであるが、共にその場の責任を負う同僚者の保育行為の意図を読みとり、尊重しつつ、子どもにとっての最善を為す必要がある。本グループ討議とポスター作成、発表を通して、協働のあり方を経験できたと考える。

聴衆は、発表を聞きながら、3つの視点を再考する機会を得た。その後、筆者は各発表に関わるコメントをしたのだが、これは学生にとっては新たな知識を得

ることとなった。教育・保育に関わる思想、それを育んできた歴史の学びは深い。ゆえに保育者は学び続ける必要があるのである。期末には、授業全体を振り返りながら、保育者の専門性についての理解と、各自の保育職への意志、目指す保育者像を言語化し確認することができた。

一人で考えることから始まり、グループで討議すること、ポスターに表すこと、発表すること、ポスターを見合うことを経て、学生は保育職を理解し、自らの目指す保育者像を描いた。学生は、保育者になる自己イメージを、本著を題材として抱くことができた。

残された課題

本著は、教育・保育に関わる多くの示唆を含む。しかし、今回、本著中の誰にも選ばれなかったテーマについては、本授業内では取り上げていない。学生が今後、再び本著を読む機会に、興味を向けることを望むのであるが、どのようにきっかけを与えていくのか、残された課題としたい。

注

- 1) <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-koyou>. において、保育士養成課程検討会での議事録や資料を閲覧できる。
- 2) 保育士資格を取得するためのカリキュラム、幼稚園教諭免許を取得するためのカリキュラムはそれぞれ別にあるのだが、重複する科目もあり、両方の資格免許の取得が可能となっている養成校が多い。そこで本稿では、保育士、幼稚園教諭の総称として「保育者」を用い、双方の養成教育を「保育者養成教育」と記す。
- 3) たとえば、第69回日本保育学会(2016)において、保育者養成校の授業研究発表が多くなされたが、科目「保育者論」と特定できる授業研究発表は見あたらなかった。
- 4) 黒柳徹子、ドロシー・ブリトン訳『Totto-Chan: The Little Girl at the Window』講談社1982
- 5) ピアノ曲集音楽物語『窓ぎわのトットちゃん』は初版が1983年に全音楽譜出版より発行されている。オーケストラ版は、コロムビアミュージックより音

楽物語『窓ぎわのトットちゃん』(黒柳徹子:朗読、小林研一郎:指揮、新星日本交響楽団:演奏)で聴くことができる。

- 6) 本著内の、リトミック他、音楽教育に関わる内容についての学生の学習プロセスを、拙稿「保育者養成校における演習『幼児音楽表現』と学生の学習プロセス—ワークショップと『窓ぎわのトットちゃん』のレポートより—」『生活科学研究誌』6.2007. pp.139-150で報告している。
- 7) 補講の調整上、連日となっている。
- 8) 佐野和彦『小林宗作抄伝 トットちゃんの先生 金子巴氏の話を中心に』1985に収められた写真を、OHC等機材を用いて紹介した。

引用参考文献

- 1) 香曾我部琢「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』59-2.2011.pp53-68
- 2) 青山佳代「保育士養成課程において求められるカリキュラムに関する考察—新設科目『保育者論』のシラバスに注目して—」『金城学院大学論集人文科学編』8-1.2011.pp.97-105
- 3) 堀智晴『保育実践研究の方法』川島書店2004.p.31
- 4) D. ショーン、佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版2001.p.76
- 5) 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社1981.p.68
- 6) 同上 p.20
- 7) 同上 p.21
- 8) 松本晴子「教育者としての小林宗作の成長の過程—5人との出会いをとおして—」『宮城学院女子大学発達科学研究』2013.p.41
- 9) 前掲5) p.198
- 10) 同上 p.265
- 11) 同上 p.167
- 12) 同上 p.43
- 13) 黒柳徹子文、いわさきちひろ絵『絵本 窓ぎわのトットちゃん』2. 講談社2014.p.88
- 14) 黒柳徹子『本物には愛が。みんな一緒』PHP研究所2014.p.40
- 15) 前掲5) p.34,p.82,p.136

16) 同上 p.248

17) 同上 p.265

付記

・本稿はその一部を、第69回日本保育学会大会において和田幸子“授業「保育者論」において目指す保育者像を探る試み～『窓ぎわのトットちゃん』を題材としたグループ発表をとおして”として発表している。

・本授業のうち、第12回目は、本学平成27年度公開授業として行った。ご参加の先生方より、貴重なご意見を頂き、授業考察のポイントを明らかにしていくヒントを得ることができた。感謝申し上げたい。